説教20221106ヨブ19：23-27、ルカ20：27-40「贖う方は生きておられ」

今日は、特に召天者を覚えてお捧げする主日礼拝ですが、この様に多くの方々とともに主に礼拝し、主に感謝と賛美を捧げる時が持てますことを、主に感謝いたします。

今日ここに集められた方々の中には、召天者の御遺族、そしてクリスチャン、そして初めて教会に来られた方も居られることでしょう。そしてもちろん、今は天に上げられ、姿は見えませんが、召天者の方々もお一人おひとり、その所から、この集会に参加をされているのです。

この集会の、最たる目的は、私たちが一つの聖霊に満たされて一つの心になって、主なる神を賛美礼拝することです。では、その肝心の主なる神様とは、誰なのか、ということが今日の説教のテーマです。聖書に記されている主なる神、とはどなたなのか、と言いますとそれは、イエス・キリストです。ですからこの教会はキリスト教会というのです。イエスキリストを中心とした集まりという意味です。

では、イエス・キリストとは、どんなお方なのでしょうか。既にクリスチャンの方であれば、キリストと共に生活しておられる中で、イエス様の豊かな慈しみと憐みのうちに心と体を癒され、イエス様に救われた喜びを味わっているとともに、イエス様の光に照らされ、罪が打ち砕かれる畏れ多い出来事をも多く味わってこられたことと思います。

又、御遺族の方々の内、未だクリスチャンでない方は、身近なクリスチャンの生活や言動に触れて、何かしら、イエス様ってどんな方か、こんな方かというようなイメージをお持ちかも知れません。

イエス・キリストは深くて広い愛の神であり、そして人となって私たちと共に歩んでいて下さいます。それがどんなお方であるのかを一回の説教で語りつくすことなど、もとより無理なのですが、今日はわかり易く簡潔に語って参りたいと思います。

イエスキリストは、今日の説教題の通り、私たち人間を贖う、生きたお方であります。この説教題は二つのことを言っています。あがなうということと生きているということです。あがなう、ということはわかりにくいですね。あがなうということはどういうことですか、といろいろな牧師に聞いてみてください。おそらくその答えは、人によって違ってくることでしょう。そんなことでいいのか、と言われそうですが、実は未だこの世にいる牧師にとっても、贖われるということは未だ未体験のことですから、すでに体験した事の様にはっきりとは語れないのです。私たち人間がイエスキリストによってはっきりと贖われるときというのは、天に召される時であります。

贖いということの意味は後で述べるとしまして、では、イエスキリストは生きたお方であるというのはいかがでしょうか。これはとてもわかり易いことでありまして、私などは、日々、生きているイエス様と対話をしながら、生活をしています。世の中には、生きた神と、死んだ神があるとされますが、イエス様は、ただ一人の生きた神様であり、私たち人間が心を開けば、いつも、どこででも、親しくお話を聞いて下さり、そしてそれに応えて下さるお方です。

その生きた神様イエス様のことを、よりはっきりと知るために、ここで死んだ神様のことを少し話しておきたいと思います。具体的に個人名を上げて恐縮ですが、もうすでに歴史的人物となっていますのでお許しください。その人物というのは、徳川家康です。徳川家康は死んだ後、日光東照宮にまつられ、神様とされました。江戸時代には日本に住む全ての人にとっての神様とされ、その遺訓が法律となって、人々を統制しました。人々は、徳川家康のことを崇め、その遺言を大切にして、それを守り続けたのでした。

さて、今の世の中で生きておられる方々のうちで、徳川家康の遺言を守り続けている方というのはどれくらいいらっしゃるでしょうか。おそらくその御遺族を中心とした何十人といったレベルなのではないでしょうか。

この様に、死んだ人が神様扱いされる場合には、その死んだ神様が時代を超えて人々と共に歩んで下さるということは出来ないことです。

一方で、イエス様は、元々神様であり、その神様が人となって地上に来られた方であり、十字架で死なれましたが、それから３日ののち、復活をされて、今は天の父なる神の右に生きて居られるのです。ですから、私たちはイエス様を最後まで信頼して、イエス様と共に歩んで行くならば、最早、死ぬことはないのです。いつまでもイエス様を礼拝賛美して生き続けることが出来るということです。今日この集いに参加されている召天者の方々もそのように生きて、それぞれの処から、場所の隔てを超えて、いまここに参加をされているのです。

このことを今日の聖書箇所からひも解けば、

ルカによる福音書/ 20章 36節から

「この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。

神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」というイエス様の言葉によって示されています。

クリスチャンは、神の子として、死んだ後に復活にあずかりたいと、祈り願いながら、この地上での日々を暮らしています。イエスキリストは御自身も生きておられ、そうして今生きている私たち人間と語り合って下さるお方です。それは歴史の初めから変わらないことで、主なる神を信じて死んだ、アブラハム、イサク、ヤコブも又、私たちがこの地上で触れ合った召天者おひとりおひとりと同じように、一人の主イエス・キリストにあって等しく、いつまでも生きる者たちとされているのです。

この様に、イエス・キリストというお方は、単純明快に、今も生きておられ、私達人間がそのことを信じ、心を開けば、いつも私たちのそばにいて語り合って下さり、最後まで見捨てずに、救いの道を歩ませて下さるというお方なのです。

どうか、今ここに生きる私たちが、イエス・キリストを信じて洗礼を受けて、イエス・キリストの救いの道を歩み出されることを祈り願っています。

それでは、贖いということはどういうことなのでしょうか。このことは、私たちが召天する時に、はっきりと分かることで、召天者の方々は、それぞれイエス様に贖われて、今、天に上げられているのですから、その贖われた喜びを十分に味わっておられることでしょう。イエス様に贖われるということは、私たち人間がこの地上での死を迎える時に、イエス様が、計り知れない愛情をもって、この私を引き寄せて下さり、そうして天の国へと連れて行って下さることです。このことは情愛に満ちた結婚生活に喩えられるでしょう。さらに、イエス様が贖って下さるということは、経済的な観点からも語ることが出来ます。皆様、ヨハネ福音書に記されている次のようなイエス様の御言葉をご存知でしょうか。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。」

この地上での結婚生活におきましても、深い情愛だけでなくそれに加えて経済的な面が整わなければ、その生活は覚束ないそうですが、実はイエス様も、私たちが天に召された後の生活において、その深い情愛に加えて、住む所という、経済的な側面もちゃんと整えて下さるのです。すなわち、イエス様との生活を、結婚生活に喩えるならば、イエス様は愛情の面からも経済の面からも万全に最後まで整えて下さるのです。なぜ、この様に言えるかと言いますと、愛情深いイエス様が私を引き寄せて下さるということは説明を要さないことでしょうが、経済的な事柄をも、この贖うという言葉には込められています。それは、その昔、神の民イスラエルが、エジプトにあって奴隷状態であったのを、主なる神がお金を払って買い戻して自由にしたという経済的な面が、この贖うという言葉には込められているのです。

結婚生活には愛情の面と経済的な面があるということを少し強調して述べましたが、イエス様は、今日のルカ福音書の箇所で、この結婚生活を引き合いに出して、私たち人間がイエス様にあがなわれるとはどういうことかを説明しようとされています。

この世の結婚の制度というのは、時代に連れて変化します。結婚観というのも変化します。例えば５０年前の昭和の時代には、概していえば、結婚ということが、何にもまして喜ばしく大切なことで、人々は結婚することを目的として生きていたように思います。しかし、あまりに結婚を美化しすぎると、弊害も現れるもので、同時に、結婚しない人或いは出来ない人が、世間から非難されたり、冷たくされるなどということが起こってしまいました。50年経った今となれば、そんなことするのはおかしなことだなあと思えますが、当時に生きた人は誰しも、そんな風には思えなかったのです。

今日のルカ福音書に出て来ます、『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』云々という結婚に関する規定も、紀元前の時代に決められていた制度であり、イエス様の時代にはかなり廃れていた制度であったようです。しかも、この結婚の規定というのは、聖書に限ったことではなくて、アジアや中東の諸民族に広くみられた結婚制度で、それはレビラト婚と言われています。このレビラト婚が、主なる神の御心に適ってとてもうまくいったのがルツ記でのルツとボアズの結婚でありまして、ルツはボアズにあがなわれて、愛情も財産も恵まれたのでした。しかし、この父権主義のレビラト婚もやがて廃れていき、聖書にもそれを禁止する記述が為され、中世のヨーロッパの教会においてはレビラト婚は禁止されていたそうです。

主イエスは、私達人間が実際に歴史的に体験している、この様な結婚制度や結婚観の変化を引き合いに出して、それでは、天の国でのイエス様と私たちとの贖われた結婚生活とはどうなるのかを示そうとされています。

主イエスは、天の国での私たちの贖われた生活について、「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。」と表現しておられます。

この新しい生活については、未だ地上にいます人たちは思いを巡らしていくしかないのですが、召天者の方々にとりましては、今、その祝福に満ちた生活を経験されていることでしょう。

先程も申し上げました通り、未だ地上にいる私たちが、イエス様にはっきりと贖われる時というのは、召天の時ということになりますので、今地上にいる私たちはその贖いの生活へと変えられることを待ち望んでいるのです。その待ち望む生活というのが、この地上における私たちの生活であります。そして、私たちの生活の最後が、そのように贖われた最高に祝福された生活であるということを信じれば、それにつながる、この地上での生活もまたその一コマ一コマがイエス様による祝福に満ちた時間であることが知らされることでしょう。

祈ります

父なる神よ

主よ、あなたは、御子イエスを信じる者たちを贖われ、天の国へと導いて下さいました。その計り知れない恵みと慈しみに感謝し、あなたを褒めたたえます。今、あなたの御そばで暮らす、召天者のお一人お一人が、永遠に生きる喜びを抱きつつ、豊かな交わりの時を迎えておられることを信じます。

今なおこの地上を歩まされる私たちも、その交わりに入れられ、あなたを賛美しながら、あなたの慈しみと憐みの道を歩むことが出来ますことを、あなたに感謝いたします。

この世の歩みは、時に、死の陰の谷に差し掛かり、不安と恐れと悲しみに打ちひしがれる日々でもありますが、そのようなときに、私たちはあなたの憐れみを祈り求め、救いの御手を祈り求めることが許されています。あなたは、私たち一人一人を決してみなしごにはされないと言われ、最後まで、一人一人に寄り添って下さいます。あなたは私たちの悲しみを喜びへと変えて下さいます。その深い恵みを覚えつつ、あなたに感謝と賛美を捧げます。

私たちの身近で嘆き悲しむ方々を、あなたの御言葉で癒し慰めて下さい。私たちがその御言葉を取次、とりなして祈っていくことが出来ますように。又、世界中で、戦争や争い、飢餓や災害の内に希望を見失っている方々に、あなたの御言葉が届けられ、いかなる暗闇の淵からも、立ちあがらせて下さいますように。あなたの愛と希望に生きる信仰をお与えください。

父と聖霊と